

# あざがくるまにこ

## Réparer les vivants

映画ライター 渡辺稔之

(八二〇字)

### profile

わたなべとしゆき 一九五九年生まれ。青山学院大学経営学部卒。アテネ・フランセ文化センターのアルバイトを経て、映画ライターに。新潮社のコミック誌『パンチワールド』―北斗の拳―、共同通信社のテレビ情報誌『T v f a n』に映画評論を、日本経済新聞朝刊日経プラス・ワンに映画人インタビューを寄稿。得意分野は映画史全般で、現在までに一万本以上の映画を鑑賞。

ヨーロッパで数々の賞を受賞したM・ド・ケランガルのベストセラー小説の映画化。監督はフランスの新進気鋭の女流監督カテル・キレヴェレで、本作が初の劇場公開作となる。

フランス、ル・アーブル。恋人ジュリエットの眠るベッドを抜け出し、友人たちといっしょにサーフィ

ンに出かける青年シモン。だが、彼はその帰り道に自動車事故に巻き込まれ、病院で脳死と判定される。知ら

らせを受けて病院に駆けつけたシモンの両親は現実を受け入れられないまま、医者から臓器移植コーディネ

ーターのトマを紹介される。一方、パリで暮らす音楽家の女性クレアは、

重い心臓疾患で臓器提供を待っていた……。

失われた命が、心臓移植という形で他者の命に受け継がれていく。青年シモンの家族、恋人、心臓移植を

受けるクレアとその家族、その橋渡しをするトマと医療スタッフ、彼らの人生が交錯し、そこから生と死の

意味、*「命」*の重さがくつきりと浮かび上がる。

回想で描かれるシモンと恋人ジュリエットの出会い。上昇するケールカーに乗るジュリエットを、自転車で追いかけるシモン。躍動する若

さ。燃え上がる恋の情熱。それを一瞬にして奪い去る*「死」*の残酷さ。

愛するものを失った父と母の悲しみ。命を受け継ぎ、新たな愛と人生に踏み出すクレア。受け継がれていく*「命」*の輝き……。

そして、トマや医療スタッフの、医療のプロとしての熟練と*「命」*への敬意を忘れない人間としての誠意

が、自然と一体になった姿も胸を打つ。心臓移植のその直前、脈打つ心臓にシモンの愛した波の音を聞かせるトマ。一人の人間が過ごしてきた

人生への敬意、命の重さが伝わってくる感動的なシーンだ。劇中、心臓移植のプロセスがリアルに、克明に

描かれるが、それが*「命」*をつなぐ聖なる儀式に思えてくるのも、この

人間の生を厳かに見つめる誠実さゆえであろう。

女性らしい繊細さで喪失と再生に直面した人々の心理をていねいに描いた、命の重さ、生きることの意味

を真摯に伝えてくれる秀作である。



© Les Films Pelléas, Les Films du Bélier, Films Distribution / ReallyLikeFilms

(二〇一六年) フランス・ベルギー合作 / カラー / 一〇四分 / 監督…カテル・キレヴェレ / 脚本…カテル・キレヴェレ、シル・トラン / 原作…メイルス・ド・ケランガル / 撮影…トマ・アラリ / 音楽…アレクサンドル・デスプラ / 出演…タハール・ラヒム、エマニエル・セニエ、アンヌ・ドルヴァル、ドミニク・ブラン、ギャバン・ヴェルデ / 配給…リアリーライクフィルムズ、コピアポア・フィルムズ / 九月一六日(土) よりヒューマントラストシネマ渋谷ほか全国順次公開